

## 赤野井水田水路へ放流したニゴロブナの追跡調査

米田一紀・岡本晴夫・磯田能年・大植伸之

### 1. 目的

琵琶湖南湖の水産資源の再生をめざして、ニゴロブナの稚魚（全長 20mm）放流が実施されている。水産試験場ではこの事業で放流された種苗を追跡調査することで、増殖促進効果を検討している。本項では 2019 年に赤野井地区の水田より赤野井湾に流下させたニゴロブナ標識魚（857 千尾放流。以下、放流魚）の追跡調査および、親魚の来遊状況調査の結果を報告する。

### 2. 方法

① 南湖での分布調査：6 月 13 日～8 月 1 日の期間に計 5 回、赤野井湾内の 7 地点においてビームトロール網による採集調査（以下、ビームトロール調査）を行った。

② 北湖での分布調査：北湖への放流魚の移動状況を明らかにするため、北湖での沖曳網漁獲魚の標識調査を行った。

③ 親魚の来遊状況調査：2018 年までの放流魚の産卵回帰状況を明らかにするため、赤野井水田水路において、4 月 19 日～6 月 25 日の期間、モンドリによる親魚の採捕調査を行った。調査期間中モンドリは常時設置し、週に 1 回の頻度でサンプルを回収した。

### 3. 結果

① ビームトロール調査では、フナ稚魚は 42 尾採捕された。うち 16 尾が放流魚であり、放流魚の赤野井湾への移動が確認された。

② 冬期(1～2 月)の沖曳網漁獲魚のうち当歳魚 6,846 尾を調査したところ、放流魚は 13 尾再捕された。生残率は 0.68% となり、昨年度 (0.45%) よりも若干上昇したものの、非常に低い状況が続いている (図 1)。

③ 調査期間中にニゴロブナ親魚は 48 尾採捕され、うち 35 尾が赤野井水田からの流下魚であった(図 2)。全体の 7 割以上が赤野井水田由来であり、他地域の水田からの放流も考慮すると、放流以前において赤野井水田周辺の再生産は非常に低調であった可能性がある。しかしながら、採捕個体の生殖腺の発達やモンドリへの産卵が確認されていることから、今後は天然域での再生産が期待される。

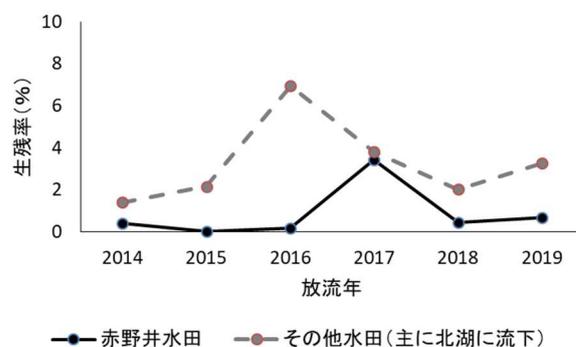


図 1 放流魚の秋季までの生残率の推移

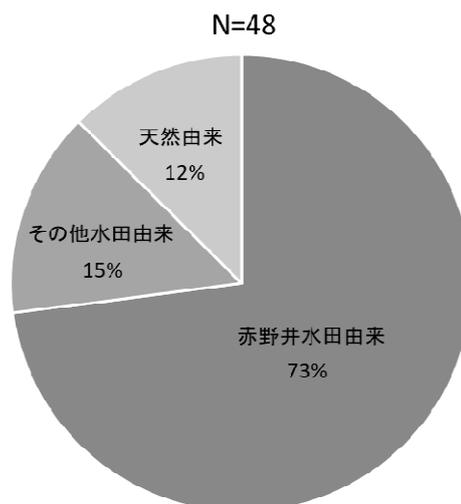


図 2 赤野井水田水路への親魚回帰状況